



1年生と6年生

部長 勝木 茂

陽射しも日に日に明るさを増し、岩瀬キャンパスの若葉の緑も少しずつ鮮やかになってきました。

新学期が始まり早3週間、1年生も入学直後と比べ、初等部での生活に少しずつ慣れてきたようで、ずいぶんと柔らかな表情となってきました。進級した2年生から6年生も新しい学級の友達と落ち着いた雰囲気でも過ごすことができています。日々の授業の様子を見ても、意欲的に学ぼうと張り切っている子どもたちをたくさん見つけることができます。先生の発問へ挙手する腕が真っ直ぐに伸びている子、ノートに書く字がこれまで以上にいいねいになっている子、そして集中力が高まり、目の輝きが増している子、どの子どもたちも大変素晴らしく、とても良いスタートができたのではと感じています。



【朝、1年生の教室での6年生の活躍場面】

初等部では、入学したての1年生が困らないように、無理なく初等部での様々な生活に慣れることが出来るように、6年生が当番制で1年生のお世話をする活動を伝統的に行っています。

6年生は、登校してきた1年生を丸玄関で迎え、上履きへの履き替え、靴箱への靴の仕舞い方等のやり方について、その1年生の状況に合わせて、お世話をします。教室では連

絡帳の出し方や身支度についてのお世話をし、その後、場合によっては絵本の読み聞かせや折り紙遊びについても、1年生が楽しく過ごせるよう努めてくれています。

活動の様子を見てみると、お世話をしてもらっている1年生も嬉しそうですが、それにも増して6年生の満足そうな笑顔が印象的です。人は、自分が周りの人たちや社会の役に立っていると感じるとき、自分は大切な人間だと思えるようになります。いわゆる自己有用感です。もちろん、子どもたちの場合は、有用感が認識できるよう親や教師、周りの大人が適切に声かけをしたり、肯定的に評価したりすることが必要です。有用感を感じることの積み重ねは、自己肯定感につながり、発展的に周りや社会へ貢献しようという意識となってきます。

何人かの6年生に聞いてみると、「1年生がちゃんと言うことを聞いてくれる」「1年生に頼りにされるのが嬉しい」「自分たちも1年生の時、その時の6年生にお世話になった。今度は自分たちがお世話をする番だから」と笑顔で話してくれました。きっと今年の1年生が6年生になった時にも同じような活動が継続していることと思います。

さて、すでに報道されているように、5月8日以降「新型コロナウイルス感染症」は感染症法では5類感染症と位置付けられ、国の感染症に対する方針は「個人の選択を尊重」することを基本とする考え方になります。一方で、感染症法上の位置付けが変わっても「新型コロナウイルス感染症」が無くなるわけではありません。初等部におきましては、換気等、基本的な感染対策は継続しつつ、今後の学校生活や授業の在り方について、学校法人としての考え方を基本に、5月10日（水）前後に改めて保護者の皆様にお知らせし、子どもたちにも必要に応じて指導をいたします。何卒、ご理解とご協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。